

京都大学	博士（文学）	氏名	黄 詩琦
論文題目	呉宓と近代西洋の出会い —一九二〇年代アメリカ文化のフィルター—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文が扱うのは、二十世紀前半の中国文芸・知識圏で活躍した評論家・雑誌編集者・詩人呉宓（一八九四—一九七八）と西洋の出会いである。呉宓は一九一七年から一九二一年までアメリカに留学し、帰国後も西洋文化の最新動向に関心を持ち続け、留学中に自分が親しんできた西洋の古典的・人文主義的精神を中国に伝えることを中心に文化・文学活動を展開した。呉宓が新聞や雑誌で展開した文筆活動の中心は、西洋の文学作品・文学批評・思想などの紹介や翻訳、および四言・五言・七言などの中国古典詩の形式で行った西洋詩歌の翻訳にある。呉宓の思想的系譜の最も重要な源泉は、十九世紀末から二〇世紀初頭のアメリカの文化的環境から生まれたニュー・ヒューマニズム（New Humanism 新人文主義）にあり、呉宓が理想とした文体への想像、絵画芸術の理解、「近代人」としての主体性の発見、欧米世界の歴史と未来の把握、詩のあり方の認識などは、バビット（Irving Babbitt）、グランジェント（C. H. Grandgent）、コックス（Kenyon Cox）といった一九二〇年代のアメリカのニュー・ヒューマニストとその周辺の人物の著作と言論に遡ることができる。その際、呉宓はアメリカ由来の思想を、中国が危機に瀕しているという判断に基づき、文化が国家の存続に重要な役割を果たすという考えに合わせて再解釈している。</p> <p>一九二二年に、呉宓は雑誌『学衡』を創刊し、白話文運動・新文化運動反対の旗幟を鮮明にしたことなどの理由で、魯迅、周作人、茅盾らに批判された。以後、呉宓は単純な「復古派」と目される場合が多く、彼の文化・文学活動における西洋との関わりや、雑誌『学衡』編集などの活動が二十世紀中国にもたらした価値は、これまでほとんど無視されてきた。一九一〇～二〇年代中国を論じる場合、新文化運動の主唱者や左翼理論家などの「進歩的知識人」による「西洋」との交流過程に焦点を当てた研究が主流となっているのが現状だと言ってよい。本論文では、呉宓の文体的な特徴、雑誌『学衡』口絵の選択に込められた美術観、中国古典詩の創作、ヴァレリー詩論などの翻訳の四つの分野で「西洋」が果たした役割という角度から、呉宓と西洋の出会いの詳細を改めて提示し、その価値を測り直してみる。</p> <p>序章「トランスカルチャーという視野における呉宓」では、まず雑誌『学衡』と呉宓の文壇デビューと、魯迅の『学衡』批判がその後の呉宓評価の方向づけに果たした役割に焦点を当てる。ここで、一方では魯迅による『学衡』批判が一九二〇年代の上海商人や鴛鴦蝴蝶派を中心勢力とする「偽国学家」批判と関連していたことを明らかにし、他方では当時の中国における言語改革（言文一致）の拡大がもたらした文言の</p>			

危機が『学衡』の主張に与えた影響を呉宓らの立場から説明する。この二つの視点を同時に提示することで、『学衡』同人と魯迅のそれぞれの立場と主張の合理性を確認するとともに、進歩的知識人による支配的歴史叙述は呉宓と西洋との関わりを隠蔽しようとする傾向を持つことがわかった。呉宓と一九二〇年代アメリカ文化との緊密な関係に焦点を当てることで、一九一七年から一九二一年にかけてアメリカのバージニア大学とハーバード大学で受けた教育、当時の欧米の政治状況や思想的傾向が、呉宓に影響を与えたことを明らかにした。これにより、過去に見過ごされてきた呉宓と西洋の出会いの真実の姿を究明する必要性を明確にした。次に、先行研究について、文化保守主義者としての呉宓像の形成史、呉宓と新文化運動との関係、一九二〇年代中国における新旧文学の主流交替という三つの視点から、研究状況とその問題点を整理した。上記を踏まえ、従来用いられてきたポストコロニアル研究やオルタナティブ・モダニティのアプローチ、国民国家の枠により制約された文化的実体の視点などを、呉宓の西洋との出会いを研究する上ではtranscultural studiesの視点に置き換える必要性があることについて問題提起した。

第一章「呉宓「論新文化運動」の文体形成：東西文体交渉の視点からの考察」では、序章で触れた魯迅の『学衡』批判の核となる問題点、『学衡』の文体をめぐって論じた。まず、『学衡』に掲載された文言体の文章は、実際には語彙・文法的に不正確な「偽の古文」に過ぎないという魯迅の批判を手がかりに、典雅な文章で白話文に対抗するという『学衡』の主張がジレンマに陥っていることを示した。その上で、魯迅の『学衡』批判は妥当なのか、古文と白話文の間にグレイゾーンがありうるのかという問題意識を持ちつつ、呉宓の「論新文化運動」（『学衡』第四号掲載、一九二二年）とそれに先立って執筆した英文エッセイ“Old And New in China”（一九二〇年）との関係を確認した。さらにC・H・グランジェントがアメリカ文化における新旧の潮流を論じたエッセイ集*Old and New: Sundry Papers*（一九二〇年）と呉宓“Old And New in China”との主題や論理の類似性を明らかにし、呉宓の英文エッセイのスタイルがグランジェント、P・E・モア、バビットなどの影響を受けていることを指摘し、それが文学性の高い語彙、欧米人文学の古典の多用といった特徴を持っていることを結論づけた。続いて、「論新文化運動」の執筆までの過程において新文化運動側との「論争」が果たした役割から、呉宓の論争文に対する姿勢と、「言語表現は誠実さに基づく（修辞立其誠）」作文理念の反映を検討した。最後に、呉宓の文体観が『新青年』などの主張と齟齬を生じた主な要因を、文言と白話の対立と、文章の風格に対する態度の相違の二点にまとめた。以上を通じて、呉宓の文体は、作り替えた文言によって、西洋の学問や思想でも支障なく議論できる書きことばを作り出そうという考えに基づいており、伝統的な古文とは異なる特質を持つことがわかる。

第二章「図像で見る「西洋」：呉宓と雑誌『学衡』口絵における西洋美術作品」では、まず「なぜ『学衡』の口絵に注目するのか」という問題を提起した。『学衡』の

口絵は、清代末期から盛んになった挿絵文化の所産として、雑誌の表紙デザイン、書体、用紙などとともに、雑誌の装丁芸術を構成し、雑誌の文化的位置づけを理解する上で文字では代替できない役割を担っている。次に、呉宓が『学衡』口絵の趣旨の設定、個々の口絵の選定に重要な役割を果たしたことを明らかにし、『学衡』の口絵と表紙デザインがモデルとした可能性のある欧米および中国国内の同時代雑誌の意匠から、『学衡』が創刊にあたって最も範としたであろう雑誌像を求め、『学衡』自身の位置づけを描き出す。続いて、『学衡』口絵に登場した多くの西洋美術作品に呉宓の美術観がいかんにか反映されているかを探る。『呉宓日記』に記された一九三〇年から一九三一年のヨーロッパ古典美術鑑賞の旅と対照すると、ルネサンス期を中心とした西洋絵画への呉宓の関心が口絵によく表れており、『学衡』口絵に付された解説が構図の説明を重心におくことから、呉宓の西洋美術理解とアメリカの画家・評論家ケニヨン・コックスの著作*The Classic Point of View, Six Lectures on Painting*との深い関係を確認できる。以上から、呉宓が『学衡』の口絵を通して伝えようとした「西洋の風景」は、ルネサンス期に頂点を極めた画法の伝統に基づき、画家の主観を強調した古典的精神を持つ絵画にほかならないことを明らかにした。呉宓の伝えた「西洋の風景」は、五・四時代の美術革命の影響を受けて、写意の中国画の代わりに写実の西洋画を提示し、西洋の未来派・キュビズム・ヴォーティシズム・後期印象派を紹介した同時期のいくつかの雑誌の「風景」とは、大きく異なるものであった。

第三章「「落花」の革新：呉宓の旧体詩創作と十九世紀のイギリス詩人アーノルド」では、白話新詩が正統性を獲得した後、文学史の主流からは保守的とみなされ続けてきた呉宓の古典詩について、一九二〇年代中国の同時代人による評価をまず検討した。それらは、呉宓の旧体詩に革新性を認める好意的意見、古典詩の技法が洗練されていないという批判に二分でき、問題発見の手がかりとなる。その上で、呉宓の旧体詩創作の革新性がどこにあるかを探るため、「落花詩八首」を例として論じた。この連作詩は、中国古典詩の「落花」のメタファー、特に王朝交代の際に遺民が婉曲に亡国の悲しみを表現した伝統を継承している。清朝の滅亡を哀しんだ陳宝琛「前落花詩」と呉宓「落花詩八首」を比較してみると、王国維自殺（1927年）の一周忌に作られた呉宓の作が、「落花」のイメージに文化的、精神的「殉教」の意味を新たに加えることで、時代の転換期を経験した世界中の知識人が共有する苦悶を表現しようとした意図が指摘できる。特に第七首は、時代の新しい波の衝撃に直面した知識人の苦しみを、亡くなった女性を悼むというモチーフで表現しようとしたイギリスの詩人アーノルドの詩「挽歌」（*Requiescat*）に「落花」のメタファーを融合させたものである。呉宓の他の旧体詩に登場する女性像にも、西洋の文学伝統との関係を探ることができる。最後に、呉宓の旧体詩について、時代特有の感情体験を描き出したことは革新的成果であったが、伝統的な詩の形式（詩形・韻律）と、中国古典詩の美的特質に一致する語彙を捨てようとしなかったため、その革新には限界性があったことに触れる。

第四章「吳宓のヴァレリー受容と一九二〇年代アメリカ：モダン観と詩の韻律観の選択をめぐる」では、まず、これまでの中国のヴァレリー受容史では、新詩人たちがヴァレリーをフランス象徴主義・モダニズムの系譜に位置づけていることにのみ関心が集中し、ヴァレリーを中国に紹介し翻訳した最初の実践者たる吳宓がほとんど見過ごされていたことを指摘した。次に、フランスから直接にヴァレリーを中国へ紹介した梁宗岱らの新詩人とは異なり、吳宓のヴァレリー受容は一九二〇・三〇年代にアメリカで活躍した「失われた世代」の詩人・評論家マルカム・カウリーを経由した事実を詳細に提示した。次に、吳宓が翻訳対象に選んだヴァレリーの二つのエッセイが、第一次世界大戦後のヨーロッパが直面する理性の危機を論ずる「精神の危機」、詩の韻律の効用を説く「詩における韻の機能について」であることを取り上げた。吳宓がそれぞれのエッセイを翻訳した目的は、前者については当時の中国の知的状況、すなわち科学至上主義や知識の大衆化を批判することであり、後者は詩の韻律重視の強調と、白話自由詩論への反駁を根拠付けることにある。これらを梁宗岱によるヴァレリーの紹介（一九二九年）と比較すると、吳宓と梁宗岱はともに詩における韻律性と音楽性の重要性を主張し、文言および伝統的な典故やイメージの使用に反対はしていないが、伝統と革新に対する姿勢に根本的な違いがあり、両者の着眼点が異なっていることがわかる。ヴァレリーが探った理性の危機に着目したことは、吳宓が中国の主流「モダニスト」とは異なるアプローチで「近代性（モダニティ）」を受け入れたことを示し、「近代」受容の多重性を反映している。

以上の四章での四つの視点による分析から、吳宓の文化的・文学的实践において「西洋」が重要な役割を果たしていたことが見てとれる。とくに重要なのは、吳宓が西洋の思想家や文学者を通して、初めて「近代」に対する認識を得たことがわかる点である。

終章では、「近代性」と吳宓の関係を、歴史的段階として、また美学的風格として、それぞれさらに掘り下げていくことを試みた。近代は、人々の時間に対する感じ方、自己と他者、社会、国家との関係に対する認識が大きく変化した時代であった。吳宓自身がこの時代の所産であり、必然的にこの時代に生きている感情をその文化的、文学的实践の中で表し、それが吳宓の「近代性」を構成している。一方、近代美術、近代詩、近代小説など、美学的風格としてのモダニズムは、吳宓自身の創作や主張とは大きな乖離を見せるが、伝統や古典の利用を排斥せず、五四世代の全般的破壊の主張には否定的であったという点では共通するものもある。吳宓が、西洋モダニズム詩論の中国における紹介に影響を与えたことは否定できない。

以上の各章の検討を通じて本論文は、中国と西洋の文化的越境の局面において、従来考えられていた以上に、吳宓がモダニズムを意識的・選択的に吸収していた事実を提示している。本論文は、一九二〇年代から固定していた吳宓像の制約を取り払い、それに取って代わる新たな吳宓を描き出す試みにほかならない。

(論文審査の結果の要旨)

呉宓(1894~1978)は中国の比較文学者・批評家・詩人である。1917~1921年にかけてバージニア大学・ハーバード大学で英文学を学び、帰国後は大学で外国文学を教えるかたわら評論誌『学衡』を自ら創刊、1920年代中国における革新主義の流行や白話文運動(言文一致)を強く批判し、魯迅・周作人ら「新文化運動」の主唱者、さらに茅盾など左翼理論家などと対立した。呉宓の思想的系譜の最も重要な源泉は、19世紀末から20世紀初頭のアメリカの新人文主義にあり、彼にとっての理想的な文体や詩法、絵画の理解、欧米世界の歴史と未来との見通し、詩のあり方の認識などは、バビット(Irving Babbitt)、グランジェント(C. H. Grandgent)、コックス(Kenyon Cox)といった1920年代のアメリカの新人文主義者とその周辺の人物の著作に遡ることができる。その際、呉宓は、アメリカ由来の思想を、1920年代中国が危機的状況に直面している現状を前提として、文化が国家の存続に重要な役割を果たすという信念に合わせて再解釈している。しかし、「新文化運動」派など1920年代思想界の主流から、文言(文語文)の使用に固執する時代後れの復古派に過ぎないと目された結果、呉宓は影響力を拡大できなかった。1947年以降は重慶に逼塞して忘れられ、文化大革命中には激しい迫害を受け、長く病んだのちに死去した。

1980年代末期からは文化保守主義者としての呉宓につき再評価する機運が中国で高まり、呉宓研究が活発に行われ、バビットおよび新人文主義と呉宓との関係に注意した研究も少なからず現れているが、呉宓の著作と1920年代アメリカの文献を綿密に対照した実証的な成果は少ない。論者は、呉宓の詩集、詩論集、六十数年間にわたって書き続けた詳細な日記など中国語および英語の著作、雑誌『学衡』、在米中国人留学生による雑誌*The Chinese Students' Monthly*を精読し、1920年代に呉宓が取り組んだ文化的・文学的実践の跡を再構成し、それを「もう一つの新文化運動」と位置づけた。

本論が具体的にとりあげたのは、呉宓の文言文の文体的特徴、雑誌『学衡』口絵の選択に込められた芸術観、中国古典詩の創作の革新性、ヴァレリーの中国語訳を通じ1920年代中国へ発した提言の4点である。散文・美術理解・詩・翻訳という異なった角度からなる本論文の構成は、呉宓の文学的実践は形式を重視したという論者の分析に呼応し、呉宓が西洋といかに出会い、1920年代中国に何を貢献できたかの検討を説得力ある形で提示した。以下、各章についてそれぞれの達成を記す。

序章「トランスカルチャーという視野における呉宓」は、呉宓が第一次世界大戦後の欧米の知的状況から受けた影響についてまとめ、従来の研究が中国文学の枠内で呉宓を捉えていたのに対して、呉宓理解のためには文化越境研究(transcultural studies)の視点を導入する必要があると提起した。

第1章「呉宓「論新文化運動」の文体形成：東西文体交渉の視点からの考察」は、1922年に執筆した「新文化運動を論ず」およびその前身として書かれた英語論文の文体や使用語彙を検討し、西洋の学問や思想を支障なく議論できる新しい中国語の文語

の生成を呉宓が志していたことを指摘している。

第2章「図像で見る「西洋」：呉宓と雑誌『学衡』口絵における西洋美術作品」は『学衡』口絵に登場した美術作品の選択の傾向から呉宓の芸術観を探り、アメリカの画家・評論家ケニヨン・コックスの著書の内容との対応関係を具体的に指摘できることを論証し、『学衡』が中国に紹介しようとしたのが西洋の古典的精神を伝える絵画であり、同時期の中国「美術革命」の影響下にある諸雑誌が取り上げる未来派・キュビズム・ヴォーティシズム・後期印象派などと異質であることを説明している。

第3章「「落花」の革新：呉宓の旧体詩創作と19世紀のイギリス詩人アーノルド」は、呉宓による七言律詩連作「落花詩八首」が、中国の伝統的な形式を装いながら、イギリスの詩人アーノルドの詩「挽歌」(Requiescat)と中国の「落花」のメタファーを融合させた新しい試みであることを論じた。特に第7首に対する重点的な読解は、呉宓の旧体詩が有する革新性とその限界とを明らかにすることに成功している。

第4章「呉宓のヴァレリー受容と1920年代アメリカ：モダン観と詩の韻律観の選択をめぐって」は、中国のヴァレリー受容において呉宓が果たした貢献を論じる。ヴァレリーの最初の中国語訳は1928年の呉宓訳のエッセイ2篇であるが、論者はその底本がアメリカの詩人・評論家マルカム・カウリーによる1924年の英訳『ヴァリエテ』であった事実を証明した。ついで、呉宓訳のエッセイ2編のうち、「精神の危機」は当時の中国に見られた科学至上主義や知識の大衆化への批判を意図していたこと、韻律の重要性を強調する「詩における韻の機能について」は1920年代に流行していた口語自由詩論への反発を念頭に置いていたことを示す。

終章は、序章から第4章までを要約したのち、呉宓が中国に伝えようとした西洋「近代性」とはどのようなものかを掘り下げた。各章の検討を通じ、中国と西洋の文化的越境において、復古主義者という、従来付加されていたレッテルとは裏腹に、呉宓がモダニズムを意識的・選択的に受容していた事実を論者は提示している。

全体を通じて本論の論旨は明確であり、特に第2、第3、第4章において、論者自身が発見した資料に基づいて論証できたことは貴重である。また、論文全体を踏まえて、20世紀中国文化が「進歩主義」に偏していった過程を説明しようとする姿勢も高く評価される。ただし、本論には未解決の問題点も残っている。序章が強調する呉宓の「文化越境性」は、19世紀末～20世紀初期中国の知識人の多くに認められ、欧米を含めての同時代的傾向でもあった。その中で呉宓の「文化越境性」がいかに特異なのが十分に説明されていない。特に、第1章にいう現代中国の学術文体形成に対する呉宓の文言の寄与も、具体的に文体にどの点で顕著かの具体的提示が必要であろう。この第1章の問題点について、論者は既に論述を補完する別稿を準備しており、より納得できる見解が示されることを期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、令和5年2月21日、調査委員4名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。